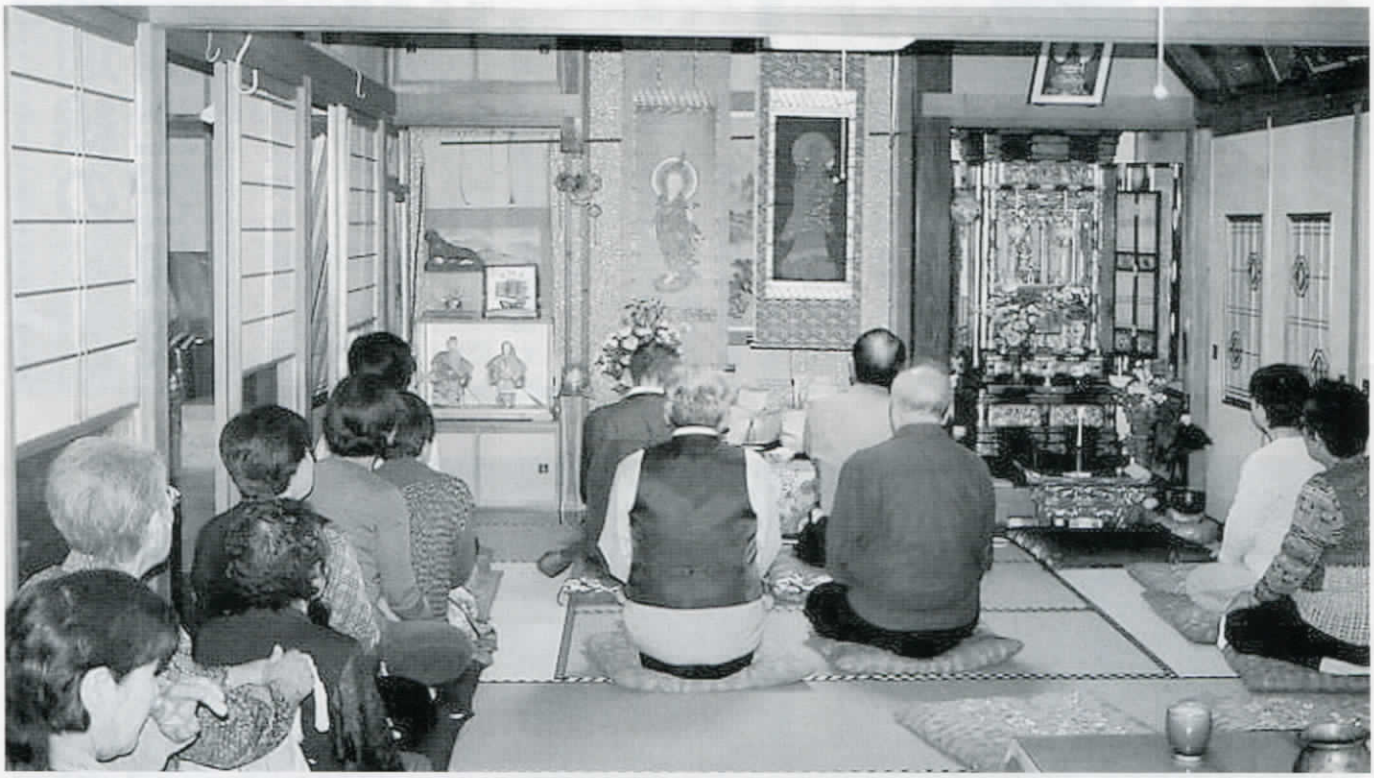
かも市史だより

平成20年10月
No.18

◆編集発行　加茂市幸町2丁目3番5号　加茂市教育委員会内市史編さん室 ☎0256(52)0080 内線480

■後須田の「地蔵講」■



▲　講中の集まり

後須田には上組と下組があり、どちらの組にも「地蔵講」がありますが、今回は上組の地蔵講をとりあげます。

上組の地蔵講は毎月二十三日に二五軒の講中が宿に集まり、オンドトリ（鉦ハタキ）を中心にして全員で念仏を唱えます。

ご本尊は地蔵様の掛け軸二本で、箱に文政七年（一八二四）の銘と当時の講中の屋号が書かれています。掛け軸の由来は不明です。地蔵講の宿は上（かみ）から順番に毎月回ってきます。宿になった家の主人は、二十三日の午前中に前月の宿に行き、地蔵様の掛け軸二本、鉦の箱、祭壇の用具などを借りてきます。

本尊様にお供えする御飯・果物・パン（オミコク）・花などは、宿がすべてまかないます。昭和三十五年（一九六〇）頃までは、オミコクに団子を作って供えていましたが、手間が大変なのでパンに変え、終わると、（オミコクとして）講中全員がいただいて帰ります。

オンドトリは二名で、正面の最前列に座り、念仏にあわせて鉦を叩きます。南無地蔵大菩薩・南無大悲観世音からはじまり、最後の般若心経を唱え終わるまでの約三十分間は、鉦と念仏の声だけが響き地蔵菩薩への祈りの世界が広がります。

（民俗部会　岩野笙子）

▲◀　講中の屋号と掛け軸の年号を記した箱

蒲原鉄道

鉄道線の廃止と加茂

「蒲原鉄道」といえば、蒲原平野の中央を堂々と走っている鉄道のように感じられます。ですが蒲原平野といえるのは五泉ー村松間程度で、山麓を遠慮しながら走っているささやかな鉄道でした。本稿では約五十五年にわたる加茂とのお付き合いを紹介します。

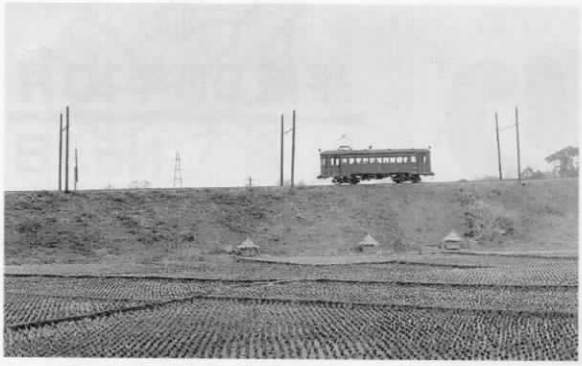
なお「蒲原鉄道」の社名はバス主体の経営になった現在でも生きていますので、名称を蒲原鉄道鉄道線としました。

鉄道線廃止前後

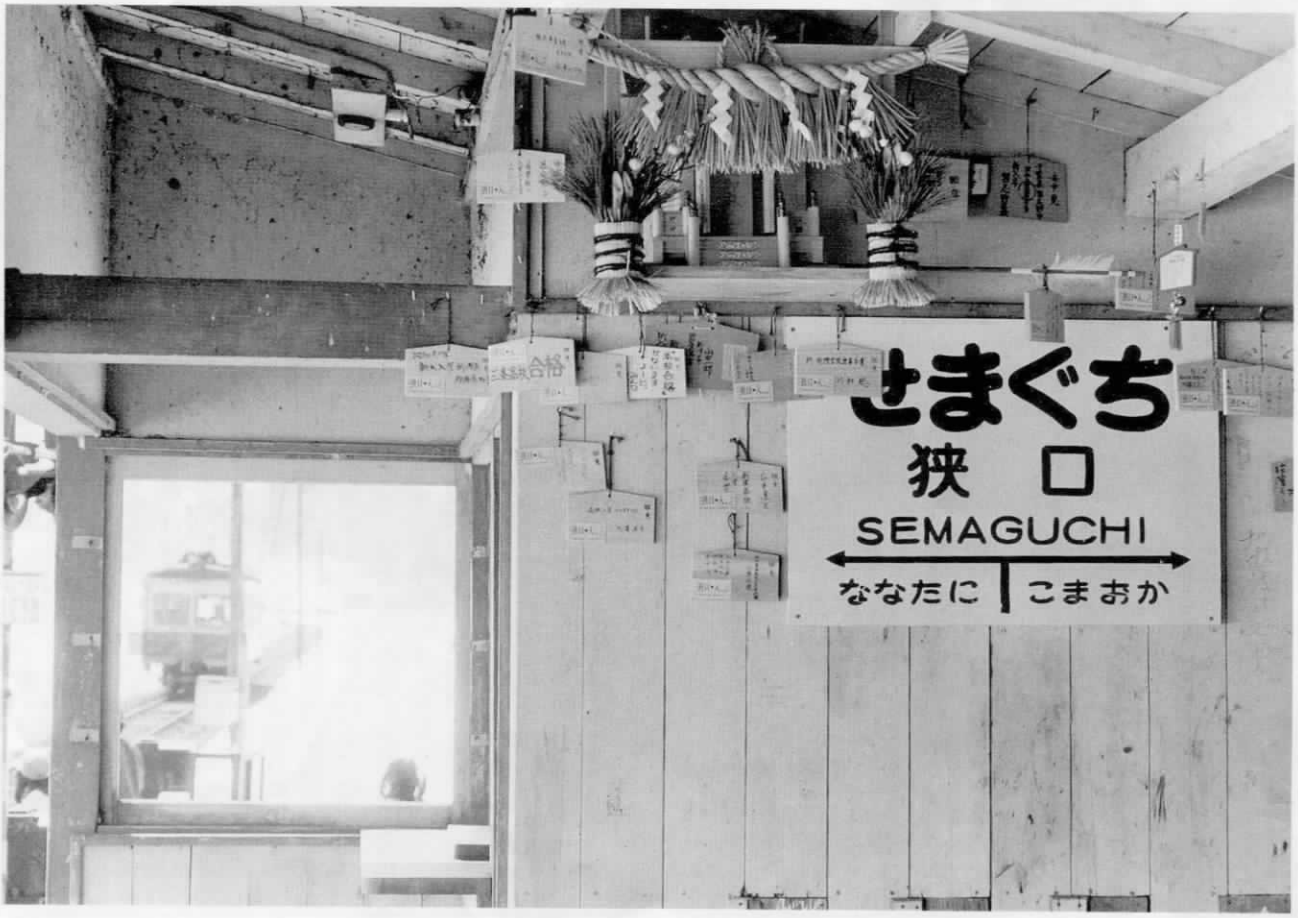
加茂駅まで全通したのは昭和五年（一九三〇）十月二十日、村松ー加茂間の営業廃止は昭和六十年（一九八五）四月一日でした。昭和も五十年を過ぎると、七谷地区は北西部をかすめる程度の路線ということもあり、通勤客の電車利用はガタ減りとなりました。また冬のドル箱であった冬鳥越スキー場へのお客も少雪化とマイカー利用で激減していきました。昼間など空気輸送に近い状態が続き、刀折れ矢尽きの状態となり廃止の憂き目になりました。

営業努力の中で思い出すのは狭口駅のことです。何故か「セマグチ」と呼ばれていたのを利用して、受験生の合格祈願の絵馬を奉納する神棚が設けられていました。この絵馬祈願で合格した受験生は、今の廃止をどう思っているでしょう。

鉄道線営業廃止の当日など、三〜



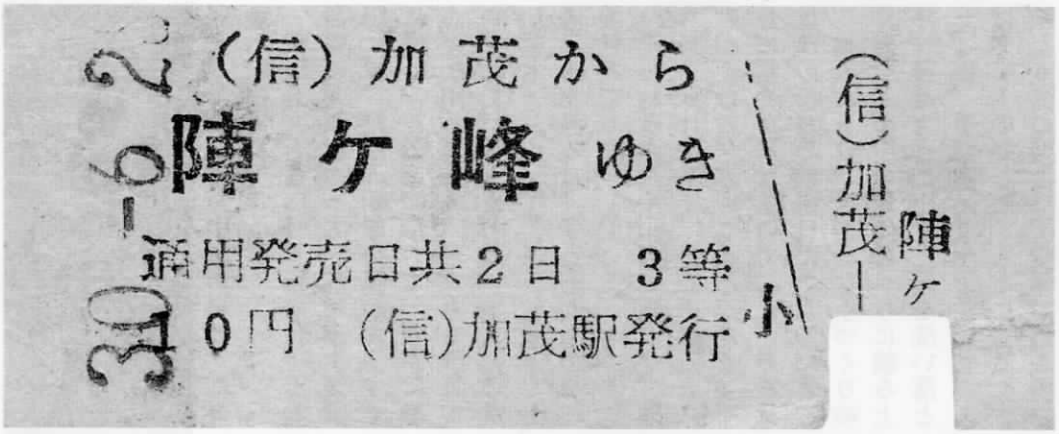
▲ **田圃を走る蒲原鉄道**（昭和32年、陣ヶ峰ー加茂間）



▶ **蒲原鉄道狭口駅の構内**　「せまぐち」の標識と合格祈願の絵馬が懸る。窓からは走ってくる電車も見える。（昭和五十八年頃）

※本稿で用いた写真はいずれも筆者撮影、所蔵

四両編成の電車が臨時列車も含めて超満員（『加茂市史』資料編3口絵参照）。何時もこんなでいたら廃止にならなかったのにと、嘆く駅員の方もおられました。



◀ **蒲原鉄道の切符**（原寸を拡大）昭和三十年（一九五五）六月二十八日付

沿線の変化

鉄道線が廃止になってから早くも二十三年を経過、沿線の変化は著しく、何処を電車が走っていたか見当もつかないところが増加してきました。

筆者が加茂経営伝習農場（現在の加茂中学校の上に存在）に勤務した当時、加茂駅との往復に、陣ヶ峰駅からよく乗車していました。昭和三十年代初期など、新生通りは加茂病院から先は家もなく、蒲原鉄道の築堤から信越本線の列車の写真が撮れたほどでした。線路を挟んだ反対側も水田地帯でした。

昭和六十年の廃線後、信越本線をまたぐ跨線橋などしばらくそのままでしたが現在は撤去され、築堤も加茂駅の向かい側は完全に平坦地化され往時の面影はありません。

東加茂駅へ通じる道路建設は、揉め事もあり大変だったといいますが、現在この一帯は並木もある広い道路になり、駅の遺構の見当も分からないくらいになっています。

加茂駅西口の建設

加茂駅の西側は昭和四十二年（一九六七）・四十四年の水害以降、施設の移転などを含めて、復興開発地域として急速に都市化が進みました。ところが加茂駅に下車して西側に渡るには大変な手間を要していたのです。そこで市は蒲原鉄道・国鉄と交渉して、建設費は全額加茂市の負担として「西口」になる蒲原鉄道加茂駅入口を建設することにしました。

この西口相当の蒲原鉄道加茂駅は昭和五十三年十二月二十六日に竣工して開設となり、大変便利になりました。国鉄が私鉄の業務も行い出入口を担当している駅はそう珍しくないのですが、加茂駅も長く蒲原鉄道の出入口業務を担当、蒲原鉄道の乗車券も国鉄が発行するタイプであり、乗車券には「（信）加茂駅発行」と記載されていました。しかしその後、私鉄の入口が国鉄の業務を担当するようになったのは極めて珍しいことでした。

この辺の詳細は『加茂市史』資料編3（九七九～九八四頁）に解説も含めて詳細に述べられているのでご覧頂きたいと思います。

蒲原鉄道電車線が廃止後も、しばらく蒲原鉄道に委託されていましたが、その後国鉄の外郭団体やシルバー人材センターを経て、無人の自動化とされています。

遺構の現状

蒲原鉄道電車線の遺構は大変少なくなりましたが、このたび調査したものを含めて述べておきます。

冬鳥越駅あとに保存の電車　スキー場のゲレンデを降りた付近に二両の電車が保存されています。一両は木製のモハ一、もう一両は半鋼製のモハ六一で、何れも蒲原鉄道電車線の廃止後に会社から寄贈を受けたものです。

モハ一は貴重な存在です。大正十二年（一九二三）の創業時の車両で、昭和二十九年（一九五四）の廃車後は倉庫兼控室として使用されていたものを復元、当時の新潟鉄工所職員田中氏などの大きな努力で今の姿になりました。

もう一両のモハ六一は昭和十六年に日本鉄道自動車（後に東洋工機と名称変更）で製造。武蔵野鉄道の運転台のみのある制御車クハ五八五六として誕生し、西武鉄道クハ一二三三を経て蒲原鉄道に譲渡され、入線のとき電動車となりモハに変更しています。

現在のモハ六一は外鈑にサビが発生し穴が開かないか心配です。一日も早い修理を望みたいものです。

加茂農林高校裏のトンネル　地面は湿気でひどいものですが、トンネル自身はまったく健在です。「お化けがでる」などの噂もありまったく手入れされていませんが、暗黒、湿気を利用した菌箪類の栽培などで活用できると思います。

建築物では七谷駅が集落の集会所となり健在です。また善作茶屋の対岸など、レール・枕木こそありませんが、道路として健在です。

また七谷地区などを走る加茂市民バスの運転士に蒲原鉄道出身の方もおられ、民営当時のように親切に運転しておられます。

（近現代部会　瀬古龍雄）

かも私史

市の立つ日

鎌倉市
藤木久志

すべては、遠い少年の日の、私の淡い記憶です。

戦後も間もない頃、私の育った中蒲原郡須田村のうち、前須田・後須田には、集落の中を道路がまっすぐに通り、その道に沿って、豊かに澄んだ小川が流れて、メダカも群れていました。大人たちは、ふだんの洗い物もここで済ませていましたし、風呂の水汲みは、子どもたちの夕べの仕事でした。

その村なかの小川のほとりが、晩春から秋にかけて、月ごとに三と八のつく日の夕方になると、きまって急に賑やかになるのでした。それは加茂の市日の前の日だったのです。

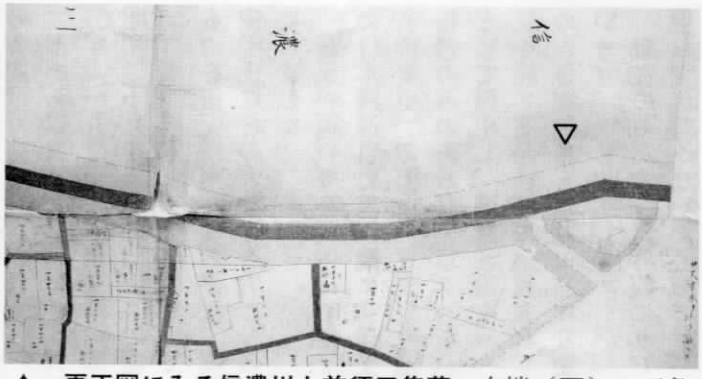
大人たちは、様ざまな手づくりの作物を、小川の両側のへりに積み上げ、競うように川水で泥を洗い落としては、手際よくリヤカーに積みあげていくのでした。ことにまるく太ったカブの白さは、少年の目を引いたものでした。カブは須田の名産でした。

この活気に満ちた、月に六回の夕方の小川べりの光景が、私は好きでした。夏になると、桃や梨がリヤカーに積まれていきました。信濃川の大きな砂丘（自然堤防）が育んだ、これも須田の特産でした。村の奥に広がる新田も、もとは、この大河の砂丘の裏に水のたまった、深田（後背湿地）だったのです。

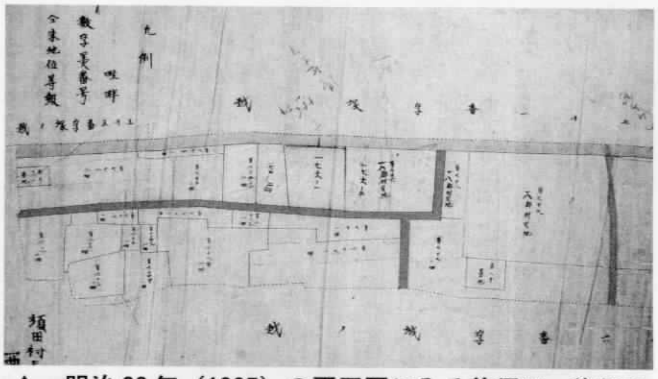
つぎの朝早く、村びとたちは、青果を積み込んだリヤカーをひいて、信濃川にかかる五反田の大橋を渡って、六キロほど離れた加茂の町へ向かいました。四と九のつく日は、町で市が立つからです。これがいまも続く「四・九の市」（しくのいち）です。月に六回の市ですから、広く六齋市（ろくさいいち）と呼ばれて、全国でも広く行われています。

信濃川に橋のないころは、関正平さんによれば、前須田に渡し場があって、対岸に張り出した山島（砂州）の村に、小舟で荷を渡したのだそうです。その渡し場は、ほそぼそと、昭和四十年代まではあったはずだと

◀ **市日の風景**（昭和三十年、瀬古龍雄氏撮影）



▲ **更正図にみる信濃川と前須田集落**　右端（▽）の三角州附近に対岸への渡し場があったという



▲ **明治28年（1895）の更正図にみる前須田～後須田へ走る水路**（上流は右側）

いいます。

加茂の町に着くと、須田の人びとは、長くのびる古い町の両側に、店先などを借りて、横並びに市店を出していました。市はいつも活気に満ちていましたし、たまに知った顔に出会うのも嬉しいことでした。町中の市店の並び順などは、自ずから決まっていたのでしょう。

やがて須田を出て、中世の歴史に興味をもつようになったとき、戦国時代の各地に、六齋市がたくさんできているのを知って、感動しました。そのたびに私は、少年の日の「四・九の市」前日の須田の川辺の出荷風景を思い出していたのです。各地の六齋市も、きっと周りの多くの村々に支えられていたのだ。そう「村から町をみる目」をもてたのも、須田育ちのおかげでした。

▲ 雪のなか市で売る物資を運ぶ人々 昭和38年1月9日、北潟 小林正愛氏撮影）

この「四・九の市」は、いつ始まったのでしょうか。そもそも加茂の町は、歴史のなかに、いつ素顔を見せてくれるのでしょうか。その破片なら、ありそうです。これも昔、加茂の出身で職場の歴史の同僚でもあった、浅見恵さんといっしょに、古川信三さんのていねいなお世話で、もと加茂の豪商であった「浅野家文書」を拝観したことがありました。中でも私は、さきごろ『かも市史だより』（No16）にも、写真入りで紹介された、一通の古文書に注目したのでした。

文面からみて、一六〇〇年（慶長五）末と推定できる、新発田藩主溝口一族が、領分の加茂に出した特許状でした。「加茂町人」平野屋五郎右衛門尉に、「上方の衆」でもあるから、とくに武装を許す、という内容でした。

溝口氏が越後に入ったのは、戦国大名の上杉氏が会津へ去った直後（慶長三年）のことですが、このとき、すでに「加茂町人」浅野氏は、堂々たる武装商人で、加茂の町を束ねるほどの実力をもっている、と見られていたのです。

「上方の衆」で「平野屋」といえば、戦国時代に豪商をたくさん出したことで有名な、大坂の平野（ひらの、大阪市平野区）の出身にちがいなく、その著名な出身地を屋号に名乗るのも、大きなブランド力を感じさせたはずです。

まだ新入りの大名だった、新発田藩主の溝口氏は、ここ藩領の南辺を占める加茂の、超ブランド「平野屋」（武装商人）を大いに利用して、まだ戦国の気風の抜けきらない、加茂の町人衆をおさえこもう、とした形跡が濃厚です。戦国の世には、武装した加茂町人たちの町ができていた、と私はみるのです。

▶ 前須田渡し跡（▽）と対岸の山島新田（⇩）（平成十八年七月関正平氏撮影）

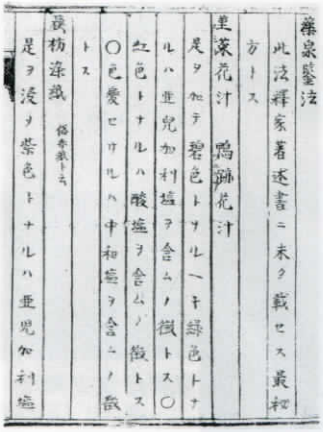
だとすれば、同じ新発田藩領でもあった、須田などの村々を広く包み込んだ、「四・九の市」のような六齋市のネットワークが、藩領をまとめるシステムとして、意外に早くできていた、と想像してみるのも、歴史の楽しみでしょう。

執筆者略歴 昭和八年（一九三三）古志郡上北谷村生まれ。教員だった父親の転勤に伴い十四歳で須田村へ居を移す。県立加茂高校を卒業。東北大学大学院などを経て、現在立教大学名誉教授。専門は日本中世史。主著に『豊臣平和令と戦国社会』（東京大学出版会）、近著に『戦う村の民俗を行く』（朝日新聞社）がある。

森田千庵と小村英庵の交遊

長岡の医者で蘭学を学んだ小村英庵（一七六六～一八三七）は、越後の温泉を科学的に研究し、文政十三年（一八三〇）に『後越薬泉』を著したことで知られています。『後越薬泉』には、「加茂　駅ナリ、長岡ヨリ九里余。四月十六日、森田千庵ノ家ニ旅泊ス」とあり、温泉調査の旅で加茂の蘭方医千庵宅に宿泊したことがわかります。同学の士として話もはずんだのでしょう、五月二十二日付けの千庵あて英庵の書状では、歓待されたお礼として、加茂周辺の産物や温泉の鑑定法をしたためたので贈呈すると記しています。この鑑定法は、まだどの本にも書かれていない極秘の方法であるとし、六種類の試薬による分析方法を説明しています。また薬草や白亜・生石灰など鉱物の産地も記されています。この時、英庵は六十三歳。三月に間瀬村の銅山に行ったものの、老年のため坑口までしか登れなかったことを悔やんでいましたが、同好の士・千庵に会うことがかない、産物について紹介できたことを「愉快ナラザランヤ」と悦んでいます。

（近世部会　池田　茂）


○藥泉鑒法六章
○乙百葛格安那産地形狀
○捲逧児即俗称香竹産地元主治
○白亜産地
○生石灰産地
○亜爾鮮産地
○乙百葛格安那圖

▲◀ **小村英庵の薬泉鑑法などを記した表紙と内容**

薬泉鑑法

此法釈家著述書ニ未タ載セス最秘方トス

董菜花汁　鴨跡花汁

是ヲ加テ碧色トナルヘキハ亜児加利塩ヲ含ムノ微トス○紅色トナルハ酸塩ヲ含ムノ微トス○色変セサルハ中和塩ヲ含ムノ微トス

最・新・刊

『加茂市史』資料編2、3 大好評発売中!!

資料編2（主に江戸時代）目次より

領主の支配
越後一揆
加茂地方の支配
検地と貢租
大庄屋と村役人
加茂地方の町と村
町場の拡大
村のくらし
災害と飢饉
賀茂明神と八幡宮
幕藩制の動揺
近世後期の領主支配
天明七年の加茂町打毀し
村松藩全藩一揆
産業と交通
加茂商人の活動
村の産業
加茂の職人と医療
陸上交通と河川水運
宗教と文化
幕末の社会変動と加茂地方
天保飢饉
天保から弘化期の領主支配
嘉永から慶応期の領主支配
幕末の世相と民衆

資料編3（明治～平成）目次より

明治維新と加茂
新政の展開と村々
義務教育の始まり
文明開化期の加茂
近代化の進展と加茂
大正デモクラシーの進展
災害と対策
人々の暮らし
産業と交通の変化
産業のデパート加茂
交通通信の近代化
農業の変貌
アジア・太平洋戦争下の加茂
昭和恐慌と戦時経済体制
交通通信
戦時下の教育と生活
戦後民主主義の進展
敗戦から復興へ
農地改革と産業の再建
加茂市の誕生
工業・地場産業の新動向
経済成長の量から質へ
加茂川改修
高度成長の終焉
生活の充実をめざして

※ 背景は本間　正氏画